



医療法人ナカノ会 理事長
ナカノ在宅医療クリニック 院長
鹿児島大学医学部 臨床教授
一般社団法人 全国在宅療養支援診療所連絡会
IT・コミュニケーション局長

中野 一司
Kazushi Nakano

【在宅医療と医療改革】

在宅医療と情報革命 [1]

①情報革命とは？

コンピュータの進化、ネットワーク化の発展に伴う人類社会の劇的な変化（革命）は、情報革命と呼ばれている。これは、

人類史上、農業革命、産業革命に次ぐ、第3の革命として位置づけられている。農業革命により人類は食物を探すために移動する必要はなくなり（定住生活の獲得）、産業革命により肉体労働を機械に代行させることが可能となった。これらの革命はそれぞれ、人類史上、人々に莫大なる富をもたらし、人々の行動様式や思想そのものを変えた。だから、革命なのである。情報革命も、これら2つの革命（農業革命、産業革命）に匹敵する（あるいはそれ以上の）

パワーをもって、我々の社会や思想を変革すると言われている。そして、現在は、まさにその情報革命の渦中にある、と考えられる。

②政治と情報革命

筆者は、一か月前からツイッターを利用し始めた。まだ詳細な活用法は分からないが、双方向性情報化時代の醍醐味、昨年8月30日の政権交代以来の日本社会の激動の変革を、ネット上で垣間見ている。また最近の民主党の小沢一郎幹事長の事件についての（一方的な）マスコミ報道とネット上で交わされる情報の乖離については、正直、驚き、注目しているところである。考えてみれば、権力とは特定

の人物を指すのではなく、意思決定の仕組みのシステムそのものである。自民党時代の権力システムの内蔵は、政府や官庁から流される特定の情報を、ある特定のマスコミ（記者クラブ、共同通信など）が一方的に国民に流し、ある意味（結果的に）情報操作が行われていたとも捉えることができる。

先日は、千葉県幕張で開催の第12回日本在宅医学会に参加したが、あるシンポジウムを聴きながら、ツイッター上での原口総務大臣のチリ沖地震に伴う津波実況速報をパソコン上で見ていた。原口総務大臣はツイッターのヘビーユーザーであるが、個人レベルで政治活動の可能な時代の到来である。

今後、金権政治を打破するために、政治活動のコストを安くする必要があり、そのためにメーリングリスト（以下ML）やツイッター、ホームページなどのインターネットツールが政治活動に活用されることは必須だろう。また、我が医療界においてもICTの有効活用は絶対に避けて通れない問題だと思われる。

ある。たとえば、話は簡単なのだが、ML活用のもたらす意味は革命的である。従来の情報を伝達する手段であるマスメディア（新聞、テレビ、映画、雑誌など）は、全て一方の方向性である。情報伝達手段である。情報伝達が一方向なため、情報を発信する側と情報を受け取る側との間に（権力の）階層構造を形成する。有名人とファンの創出である。ファンとは、有名人に恋い、あこがれながらも、有名人からは覚えてもらえない、はかない存在である。

本稿では、MLの有効活用を例に、在宅医療と情報革命につき、2回に分けて、述べてみたい。

③ML活用のもたらす意味

筆者は、現在40以上のMLに所属していて、1日300通以上の電子メールを受け取る。MLは、会員の発信した電子メールを全ての会員に配信される仕掛けで

マスメディアに対し、ML（やツイッター）は、その情報交換が双方向であり、ML上で会員全員参加型の会議が常時開催できるシステムである。MLは対

人間関係に意識革命を起し、社会（組織）構造に革新をもたらす。実際、筆者自身もMLに参加して、開業以来10年間で完全に意識が変わった。そこは、年齢も、性別も、職業も関係のないフラット社会である。その人がどんな社会的立場の人か（肩書き）より、その人がどんな考え方で、どのような情報を発信するのかなど、その人（人物）そのものが問われる。

このことは、人間社会（人間関係）そのものを根本的に変革するパワーを秘めている。上意下達縦割社会からネットワーク型フラット社会へのパラダイムチェンジである。昨年の米国、日本での政権交代は、情報革命をもたらした社会変革（革命）とも捉えることができる。

④勉強（学習）することの重要性

情報革命による意識変革は、肩書き社会から人物そのものが評価される社会へのパラダイムチェンジをもたらす。このような時代を生き抜くには、勉強（学習）が全てである。そして、そのための情報収集や情報交換に

は、MLや電子メール、インターネットなどのICTが大いに役立つ。

在宅医療という比較的新しく、未開な（学問）分野を開拓する時、情報はとつても貴重である。これらの情報も数々の医療系MLから得てきた。開業当初（10年前）、在宅人工呼吸器管理（勿論初めての経験）を始めるにあたり、某MLで問い合わせたところ、その日の内に10ほどのメールの返事が返ってきて、本当に助かり、感激した。某MLのメンバーが、「メールリクエストは知識と知識の無料の物々交換の市場である」と言っていたが、当を得た発言だと思う。

現在、筆者が参加している40以上のMLの中で、1）医療法人ナカノ会ML、2）在宅ケアネット鹿児島ML、3）一般社団法人全国在宅療養支援診療所連絡会ML、を積極的に管理、活用している（表参照）。今回は、2）と3）について紹介し、次回に1）を含めた医療法人ナカノ会のICTの活用と経営哲学について述べてみる。

⑤在宅ケアネット鹿児島ML

(CNK・ML)

2006（平成18）年11月21日に筆者自ら立ち上げた在宅ケアネット鹿児島ML（表参照）では、全国各地から、さらに遠くはポストンやロンドンからの多数の参加者があり、日夜、医療介護問題にとどまらず、政治、経済、歴史、文化、地域づくり、ICT、教育、ジェンダーの問題などについて、活発な議論を展開している。2010年2月現在で参加者は1050名で、そのうちの約3割が在宅医療に関心のある医師であるが、訪問看護師、ケアマネジャー、ヘルパー、薬剤師、歯科医師のほか、医療教育関係者、行政関係者、一般市民、患者、家族（遺族）の参加もある。特にコメディカルの一般市民の意見が多いのが大きな特徴である。

2009年2月28日～3月1日に鹿児島市で開催された第11回日本在宅医学会の企画、運営は、実行委員会を組織せずに、筆者一人で、本ML（本MLは第11回日本在宅医学会の準備のために立ち上げた）を通じて企画、連絡、広報を行う一種の社会実験であったが、結果的に

MLのメンバー全員が実行委員兼演者兼聴衆となり、90の一般演題（ポスター発表）、1000名の学会参加（例年の倍数）で、大成功に終わった。この様子は、本誌「Visionと戦略」の2009年4月号で紹介されている。

⑥一般社団法人全国在宅療養支援診療所連絡会ML

在宅療養支援診療所の連絡会である一般社団法人全国在宅療養支援診療所連絡会（表参照）が、国の在宅医療推進会議のもと2008年3月29日に設立された。筆者がIT・コミニケーション局長を担当し、2009年8月1日から一般会員を募集し、ICT（連絡会ML、連絡会HP）をフル活用しての活動を開始している。現在会員は700名を超え、連絡会MLにて在宅医療に関する、いろいろな問題の情報交換を活発に行なっている。

特に在宅医療は新しい分野であつて、参入してくる医師もなかなか診療報酬の請求の仕方が分からないとか、あるいはモルヒネの使い方はどうするのかだとか、認知症の扱いをどうするのかだとか、など情報交換し、一般開業医に対しての在宅医療参入支援の大きな役割を担っている。

本連絡会の目的は、我が国における在宅医療の推進である。医療法人ナカノ会で得た10年間の在宅医療の経験と知識は、惜しみなく本連絡会MLで公開し、全国での在宅医療を推進して、我が国の医療改革に貢献したいと願っている。

次回は、医療法人ナカノ会のICT化と活用と経営哲学について述べ、在宅医療と情報革命につき更に考察を進めてみたい。

【ホームページ紹介】

- 医療法人ナカノ会
<http://www13.ocn.ne.jp/~nazic/index.html>
- 在宅ケアネット鹿児島
<http://www13.ocn.ne.jp/~nazic/carenet.html>
- 一般社団法人 全国在宅療養支援診療所連絡会
<http://www.zaitakuiryo.or.jp/>